

奄美大島におけるアマミノクロウサギの繁殖と イエネコによる幼獣捕獲

鈴木真理子¹・大海昌平²

Reproduction of Wild Amami Rabbits and a Feral Cat Predation on a Juvenile of the Amami Rabbit in Amami-Oshima Island

SUZUKI Mariko¹ and OUMI Shohei²

1: 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2: 奄美両生類研究会

1. *International Center for Island Studies, Kagoshima University*

2. *Amami Amphibian Research Group*

要旨

奄美大島山間部の果樹園でアマミノクロウサギの繁殖穴を発見し、2015年から2017年まで自動撮影カメラによる記録を行ったところ、繁殖が2回観察された。アマミノクロウサギの母獣は妊娠初期から繁殖穴の手入れをはじめ、出産後は2日に一回の頻度で授乳に訪れていた。そのうちの一回では、離巢間近と思われる幼獣が繁殖穴の前でイエネコに捕獲された。イエネコによる在来種の捕食は、奄美大島や徳之島でも深刻な問題となっている。本観察でイエネコの脅威が改めて明らかとなった。

はじめに

奄美大島と徳之島にのみ生息するアマミノクロウサギ *Pentalagus furnessi* は、ヨーロッパアナウサギ *Oryctolagus cuniculus* と同様に別居型巣穴での養育を行うことが知られている（浜田1990、酒匂ほか1991）。繁殖行動の解明は、その種の基礎生態情報としてだけでなく、生息域の限られた希少種の生息環境の保全や域外保全においても重要な情報となる。しかし、アマミノクロウサギの繁殖行動の詳細は明らかになっていない。

2015年、奄美大島の山間部にある果樹園にて、アマミノクロウサギの繁殖用

の巣穴（以下、繁殖穴）を発見した。そこで、アマミノクロウサギの養育行動および幼獣の発達過程を明らかにするため、2015年9月から2017年3月まで自動撮影カメラ（Ltl-Acorn 6210, Shenzhen Ltl Acorn Electronics Co., Ltd., Shenzhen, Guangdong, China）を用いて記録を行った（鈴木・大海 2017b）。

奄美大島山間部の果樹園で観察されたアマミノクロウサギの養育行動

繁殖穴は果樹園内の盛土に掘られた。観察期間中、2016年4月から5月までと、2016年12月から2017年2月までの2回の繁殖が確認された（鈴木・大海 2017b）。この繁殖以外の期間にも数回巣穴の前にアマミノクロウサギは映ったが、いずれも短時間の匂い嗅ぎか穴掘りであった。また、6月から8月の間は常時カメラが稼働していたにもかかわらず、成獣は全く映らなかった。

アマミノクロウサギの養育行動は、ヨーロッパアナウサギと同様に、繁殖穴形成、産座づくり、出産、授乳からなっていた。繁殖穴形成から授乳の間、母獣の訪問時刻は深夜に集中し、産仔数は1頭または2頭で、授乳は2日に1回の頻度で規則正しく行われていた。今回新たに明らかになったのは、繁殖穴の手入れが妊娠初期（推定された出産日の約3週間前）から始まり、推定された出産日の約1週間前に終了し、土で閉じられることであった。これは同種他個体や他種から手入れした巣穴を守るためだと考えられる。巣穴を閉じる行動は幼獣が巣穴の外を探索するようになるまで見られた。

幼獣は生後約10日齢までは繁殖穴の中で授乳され、約10日齢からは繁殖穴の入口で授乳されるようになり、30-34日齢で授乳後に巣穴の外を出歩くようになった。母獣の授乳のための訪問のうち授乳時間は非常に短く、滞在時間の大半を繁殖穴の入口の開け閉めであった。この巣穴の開け閉めに要する時間は、幼獣の成長とともに短くなった。

以上の観察より、アマミノクロウサギは暑い夏季を避けて繁殖を行っていること、他のウサギ類と同様に養育行動にかかる時間は非常に短いこと、さらに幼獣の成長に合わせて養育にかかるコストを減らしている可能性が示唆された。

イエネコによる離巢期のアマミノクロウサギ幼獣の捕獲

2回目の繁殖の記録中、離巢間近の幼獣はイエネコに捕獲された（鈴木・大海 2017a）。

繁殖穴における出産は2017年1月14-15日の夜に行われ、その後母獣による授乳が行われていた。2月19日深夜1時ごろ、初めて穴の入口が塞がれなかった夜、1頭で外へ出ていた幼獣（35日齢）は、イエネコによって捕獲され

た。繁殖穴の上部斜面にいた幼獣は、鳴きながら繁殖穴へ戻ってきたところを、穴の前で待ち構えていたイエネコによって捕獲され、そのまま穴の下方へ引きずられていった。死体は見つからなかったが、この動画が撮影された後、幼獣は巣穴に戻っていないことから、捕食あるいは受傷等の原因で死亡した可能性が高い。

イエネコは幼獣の捕獲から約 30 分後、および 1 日後と 4 日後に繁殖穴前に出現した。母獣は幼獣が捕獲された 1 日後に繁殖穴を訪問しており、幼獣は離乳前であったと考えられる。母獣はその後繁殖穴を訪問していない。幼獣の捕食は、繁殖力が高いとは言えない本種の個体群動態に大きな影響を与える。本観察により、アマミノクロウサギに対するイエネコの脅威が改めて明らかとなった。

イエネコ *Felis catus* は、近年世界各地で在来種を絶滅に追いやるなど、特に島嶼部において深刻な問題となっている (MEDINA et al. 2011)。奄美大島や徳之島でも、山間部で生息しているノネコ (野生化したイエネコ) による固有種や固有亜種の捕食が問題となっている (塩野崎 2016、SHIONOSAKI et al. 2015、藤田 2017)。これらの島に生息する在来種は、食肉目のいない環境で生息してきたため、外来食肉目の捕食圧に対して非常に脆弱であると考えられる。今回の観察はそれを裏付けるものであり、山間部でのイエネコによるアマミノクロウサギ個体群への負の影響を早急に取り除く必要がある。

イエネコによる捕獲の映像は、動物行動の映像データベース Movie Archives of Animal Behavior (<http://www.momo-p.com>) に登録され、公開されている。データ番号は momo170615un02b である。また、本映像の直接の URL は、<http://www.momo-p.com/index.php?movieid=momo170615un02b> (2017 年 6 月 21 日登録) となっている。

引用文献

- 酒匂 猛・内村正之・是枝吉徳 1991. アマミノクロウサギの飼育と繁殖. どうぶつと動物園 43: 272-274.
- 塩野崎和美 2016. 好物は希少哺乳類—奄美大島のノネコのお話. 「奄美群島の自然史学」(水田 拓, 編), pp. 271-289. 東海大学出版部, 平塚.
- SHIONOSAKI, K., YAMADA, F., ISHIKAWA, T. and SHIBATA, S. 2015. Feral cat diet and predation on endangered endemic mammals on a biodiversity hot spot (Amami-Oshima Island, Japan). *Wildlife Research* 42: 343-352.
- 鈴木真理子・大海昌平 2017a. 奄美大島における自動撮影カメラによるアマミ

- ノクロウサギの離乳期幼獣個体へのイエネコ捕獲の事例. 哺乳類科学 57: 241-247.
- 鈴木真理子・大海昌平 2017b. 奄美大島の果樹園の同一繁殖穴におけるアマミノクロウサギの繁殖と養育行動の2事例. 哺乳類科学 57: 257-266.
- 浜田 太 1999. 時を超えて生きるアマミノクロウサギ. 小学館, 東京, 76 pp.
- 藤田志歩 2017. 奄美大島と徳之島におけるノネコ問題の現状と取り組み. 「奄美群島の外来生物—生態系・健康・農林水産業への脅威」(鹿児島大学生物多様性研究会, 編), pp. 215-225. 南方新社, 鹿児島.
- MEDINA, L. I. X. M., BONNAUD, E., VIDAL, E. and TERSHY, B. R. 2011. A global review of the impacts of invasive cats on island endangered vertebrates. *Global Change Biology* 17: 3503–3510.